

Title	エギディウス・ ロマヌスにおけるesseとessentia : Theoremata de esse et essentiaについて
Sub Title	"Esse" and "Essentia" in Giles of Rome
Author	柏木, 英彦(Kashiwagi, Hidehiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.40 (1961. 10) ,p.145- 168
JaLC DOI	
Abstract	During the later thirteenth and early fourteenth centuries, Giles of Rome, one of the most outstanding thinkers played the important part in respect to the controversy about the real distinction between "esse" and "essentia". He wrote two books about htis problem; "Theoremata de esse et essentia" and "Quaestiones disputate de esse et essentia." E. Hocedez maintained that Giles physically and materially interpreted the problem of the real distinction in Thomas Aquinas, indicating the neoplatonic characteristics in the doctrine of the real distinction in Giles of Rome. The novelty in Giles' thoughts on the real distinction pointed out by Hocedez is as follows; (1)"esse" and "essentia" are two things. (2) "esse" can be separated from "essentia". (3) the systematical use of "forma totius" and "forma partis" for the purpose of explaining the formula "forma dat esse". In this article, I intend to show that Hocedez' interpretation concerning "Theoremata" is historically not legitimate; Giles was a Thomist in the sense that he overcame the Essentialism and that he rightly understood the metaphysical, transcendental character of "esse", asserting that "esse" does mean the foundation of being as an act, not "existere in rerum natura".
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エギディウス・ロマヌスにおける *esse* と *essentia*

—Theoremata de esse et essentia について—

柏 木 英 彦

一

ゴドゥフロワ・ドゥ・フォンテーヌ (Godefrid de Fontaines) がパリ大学随一の教授と称賛したエギディウス・ロマヌス (Aegidius Romanus) はアンリ・ドゥ・ガン (Henri de Gand) と共に十三世紀後半における最も重要な思想家の一人であり、この時代の思想研究の中心に置かれるべき人物である。エギディウスは当時の哲学論争の主要テーマであつた *esse* と *essentia* の実在的区別 (*distinctio realis*) の問題において常に一方の側の代表者であり、影響も大きかつたが、今日の研究はまだその思想の全貌を明らかにするほど進んではない。

エギディウスは長い間トミストとして扱われてきたが、現在では従来と異なる解釈がなされている。今世紀のエギディウス研究は一九一〇年にマンドネが発表した論文^(註1)に始まるが、その中でマンドネはエギディウスがトマスの忠実な弟子であり、いくぶん折衷主義の傾向があるとしても、それは見かけ上であり、またアウグスティヌスを弁護しているところが見出されるとしても、エギディウスを導いたのはトマスとアリストテレスであつたと論じた。これに対

して E. Hocedez は一九三〇年にマンドネ記念論文集に寄せた論文ならびにエギディウスの「Theoremata de esse et essentia」批判版の序文において、トマスとエギディウスの若干の相異点を指摘し、エギディウスの思想における新プラトン派の影響について述べた。かれはエギディウスが独創的な思想家であると結論し、マンドネの見解を訂正したのである。近年 P. Nash は Hocedez の示唆に基づいてエギディウスにおける新プラトン派の影響をさらに強調し、マンドネと反対の結論に達している。^(註4)

Hocedez の研究は劃期的なものであつたが、しかし若干疑問点があり、しかもその後の哲学史家^(註5)（ジルソン、コプルストン、レフ等）によるエギディウス哲学の叙述がすべて Hocedez の研究に基づいているだけに、Hocedez の解釈を検討することは重要であると思う。

esse と essentia の実在的区別をめぐる論争の直接の動機となつたのはエギディウスの「Theoremata de esse et essentia」（以下 Theoremata と略す）であつたが、エギディウスにはこの問題についてはかに「Quaestiones disputate de esse et essentia」がある。おそらくプロクロスの「Στοικεωδης θεωρητικη」に範を取つたと思われる「Theoremata」が哲学的であるのに対して、「Quaestiones」は論争の書であり、神学的に問題を考察していると云われている。本稿では「Theoremata」についてのみ考察することにした。^(註6)

二

creatura において esse と essentia が実在的に (realiter, secundum rem, re) 異なるというトマス・アキナスの説はやがて激しい論争を惹き起すことになり、論争は一二七〇年代以後複雑な様相を示すが、その原因はこの問

題に関して、(1)ボエチウスの *quod est* と *esse* との区別、(2) *esse* は *essentia* にとって偶性的であるというアヴィチェンナの説、(3)アリストテレスの説の三つが知られていたことに求められよう。ボエチウスの *quod est* と *esse* の区別についての解釈はエギディウスとアンリ・ドゥ・ガンの間で論争され、トマスにおける「実在的区別」の意味はアヴィチェンナの説が知られていたために容易に理解されなかつた。なかんずくトマスの説がドミニコ会の学者あるいはトミストと呼ばれる人々にさえ反対されたのは「実在的区別」がアリストテレスと一致しないからであつた。^(註8) シジェル・ドゥ・ブラバン (Siger de Brabant) はトマスの説が矛盾を含むものとして批判しているが、その批判は当時の事情をよく表わしている。シジェルはアヴィチェンナの立場を反駁した後、自己の立場とアヴィチェンナの立場との中間を挙げている。

ponunt autem quidam, modo medio, quod esse est aliquid additum essentiae rei, non
pertinens ad essentiam rei, nec quod sit accidens, sed est aliquid additum quasi per
essentiam constitutum sive ex principiis essentiae.^(註9)

これは明らかにトマスの「形而上学註釈」^(註10) から取られたものであるが、シジェルはこれについて次のように論じている。もし *esse* が偶性であるなら、たしかに本質に付け加わるものであるが、これは右の立場と矛盾する。*esse* が事物の本質ではなく、本質の原理を通じて構成されたものであると云うことは、同一のことを肯定すると同時に否定することである。けだし本質の原理によつて構成されたもの (*constitutum per essentiae principia*) とは、本質の原理によつて構成された事物そのもの (*ipsa res ex illis constituta*) にほかならないからである。もし *esse* が事物そのものでもなく、本質の部分でもなく、偶性でもなく、事物の本質に付け加わるものであると云うならば、第四の

本性(*quarta natura*)を指定することになる。シジェルはこのような理由から *esse* が本質そのものにはかならないと主張している。

終始エギディウスの反对者であつたアンリ・ドゥ・ガンも *essentia* とは実在的に異なる *esse* について同様の疑問を表明している。

quaero aut (esse) est substantia aut accidens, medium enim non est ponere, nisi creatorem,
qui neque est substantia neque accidens praedicamenti alicuius. (註11)

このような本質主義に対して、「実在的区別」の問題を整然と叙述した書である「*Theoremata*」はそれまでこの問題について比較的無関心であつた学者達の注意を引き、論争に決定的な影響を与えたのである。Hocedez は、エギディウスがかつての師トマスの立場を誇張し、師の深い形而上学的精神を理解せず、「*Theoremata*」は一見してトマスのであるが、実際には両者の間かなりの距離があると論じている。「実在的区別」に関して Hocedez が指摘したことは次の三点に要約できよう。

- (1) エギディウスは *esse* と *essentia* が二つのもの (*duae res*) であると主張した。
- (2) エギディウスは *séparabilité* の観点から「実在的区別」を論証した。
- (3) 当時一般的であつた命題 *forma dat esse* を説明するための *forma partis* と *forma totius* の *systematique* な使用には新プラトン派の影響がある。

Hocedez は特に *duae res* という表現に注目し、エギディウスは *res* によつて *esse* と *essentia* を二つの独立する存在者 (*deux entités indépendantes*) のごとく考え、「実在的区別」をトマスよりも *matériel* な *physique* な

意味で理解したためにトマスの精神に沿って問題を深めることができなかつたと述べている。そこで内容の検討に入る前にまずエギディウスは「実在的区別」を表わすのに、いかなる用語を使用しているか、*res* はいかなる意味で用されているかについて簡単に記しておきたい。

エギディウスは「実在的区別」を表わすのに「*realiter*」「*secundum rem*」「*ut duae res*」を使用しているが、最も頻繁にみられるのは「*realiter*」であり、*esse est realiter differens ab essentia* と云われる場合もあり、これに *res* を加えて *esse est res realiter differens ab essentia* と云われている。したがって必ず *res* が使用されているわけではない。しかも *esse* が *actualitas* であることを表わす時は、*esse est actualitas realiter differens ab essentia* と云われているので、これに *res* を加えることは不可能である。つぎに *res* はいかなる意味で使用されているかをみると、*res materiales*, *res immateriales* のごとく、*entité* の意味でも使用されているが、他の意味でも用いられている。すなわち *res* は種、類、分量、延長を表わすのにも使用されており、たとえば *differentia non est res realiter differens a genere* と云われている。したがって *res* は必ず *entités* を表わすというわけではなく、日本語の「もの」のごとく、極く軽い意味で広く使用されているのである。*duae res* という表現が主に用いられるのは *Theorema XIX* のみであるが、この *Theorema* は「実在的区別」に反対する二つのモティーフを挙げて、これを拒否している箇所であり、「実在的区別」に反対する人々を表わすのに、*esse* と *essentia* を *duae res* として人々、というふうに表示している。これは「実在的区別」を強調するあまり、「実在的区別」を表わすところの他の表現「*secundum rem*」「*re*」等の用語との関連からいきおい *duae res* という表現を取つたと考えられる。第一、エギディウス自身 *esse* と *essentia* が存在者であるとはどこにも述べていないのであり、*res* が存在者の意味で用

いられ、しかも esse と essentia との関連において使用されている次のような表現は res を存在者と解釈するのを困難にする。「res は essentia と付け加わる esse によつて existere する」(Theorema XIII)「われわれは essentia と合成するものが esse であると考え、res は esse と essentia から合成されている」(Theorema XVII)。
 シルソンも、esse と essentia が duae res であるというのはエギディウスの新しい考えであるとして、
 すぐに res の意味はあまり明瞭ではないと述べている。シルソンのように、esse et essentia sunt duae res realiter differens と、これだけ切り離してみるといかにも Hocedez の指摘する通りであるように思われるが、そうすると esse と essentia の意味が理解できなくなるであらう。このことは以下「Theoremata」をできる限り原文に即して考察することによつて明らかとならう。

三

エギディウスが esse と essentia の実在的区別を示すのに duae res という用語を使用しているのは Theorema XIX であるが、そこでのいかなる意味で duae res が使用されているかをみるためにやや詳しく述べたい。まず Theorema を左に挙げる。

Omne esse quod fuit in compositis a forma totius vel quod in simplicibus causatur a quidditate non est conjunctio essentialium partium, nec respectus ad agens, nec determinatio materiae vel subjecti, sed est actualitas quaedam realiter differens et superaddita quidditati ex quo esse et essentia componitur quodlibet citra primum.

この最初の部分 *esse quod fuit a forma totius....causatur a quidditate* はあたかも形相が *esse* の原因であることを示すように受け取れるが、そうでないことについては、(四)で触れることにする。*esse* と *essentia* との實在的区別を主張する立場は右の引用の最後の部分 (*esse*) *est actualitas quaedam realiter differens superaddita quidditati* に当るわけである。したがって *essentia* に対して *esse* を *actus* として把握する立場である。このように *esse* を原理の面から考えているところからみても、すでに *res = entité* と解することは困難であろう。

さて第一の異論、すなわち *esse* を *essentia* の部分の結合とする立場はおそらくシジェル・ドゥ・ブラバンならびにフランススコ会学派の *universal hylomorphism* を主張する人々のことであろう。*res materiales* が形相と質料の合成体であることから、かれらは *esse* が形相と質料の合成にはかならないと主張する。そこで *res materiales* はどうして今は *esse* を持ち、以前には *esse* を欠いていたのかという問いに対して、質料が、以前には結合していなかった形相に今は結合しているから、今は *esse* を持つとかれらは答える。したがって *esse* は形相と質料とに付け加わるものではなく、両者の結合にはかならない。

これに対してエギディウスはまず *generatio* と *creatio* を区別し、*generatio* はわれわれに形相と質料の合成を教え、*creatio* は *esse* と *essentia* の区別を教える述べている。*generata* は先在する質料から生ずるが、*creata* は *materia concreata* から生ずる。*esse* が *essentia* から異なるもの (*res differens*) であることを研究する理由は、*res creata* が合成体であり、創造されたものであつて、存在したり存在しなかつたりする (*potest esse et non esse*) ことをわれわれが認めるからである。*potentia tantum* も *actus tantum* もそれだけで創造されるのではなく、両者の合成体が創造されるのである。合成体でないものを存在したり存在しなかつたりするとは云わない。

要するにエギディウスは *res creata* の可滅性 (*annihilatio*) を説明するのに「實在的區別」が必要だと述べているのである。*primum (deus)* のみが *suum esse* であり、他のものがすべて合成体であることはエギディウスがくりかえし強調するところである。*res immateriales* といえども例外ではなく、たとえ形相と質料の合成はないとしても、可滅的である以上 *esse* と *essentia* の合成体であり、*tanta actualitas* ではなく、*primum* から *esse (= actualitas)* を与えられることなくしては *existere* しえない。もし *esse* が本質の部分であつて、*esse* が付け加わらなくとも *existere* しようとすれば、*res creata* は可滅的でなくなるであらう。

第二の異論、すなわち *esse* が作用者への関係 (*respectus ad agens*) にすぎないという主張は明らかにアンリ・ドゥ・ガンの説であり、この異論は後にスコトゥスからも批判されることになる。^(註12) かれらによると *esse* は *praedicaamentum* であり、*primum* の中に *idea* を持つものとしての *essentia* にほかならない。*esse creatum* は作用者の結果 (*effectus agentis*) であり、*essentia* に作用者への関係以外に何も加えない。したがつてなぜ今は *esse* を持ち、以前には持たなかつたのかという問いに対して、今は作用者への現実的關係を持ち、作用者の結果であるが、以前にはこの現実的關係を持たなかつたからであるとかれらは答えるであらう。

これに対してエギディウスは、あらたに作用者への現実的關係を持つたという理由で *res* があらたに存在し始めた^(註13)と論ずることはできないと述べているが、これはトマスにもみられる見解である。あらたに *actualitas* を得て存在し始めることは、以前には持たなかつた現実的關係をあらたに持つというだけではない。すべての原因は原因である限り、事物を存在せしめる (*facit ad esse rei*) のであるから、*esse* を与えるものである。すべて結果は他者から *esse* を受容する限りで結果である。いかなる結果も作用因 (*causa agens*) への現実的依存と現実的關係なくしては

存在し始めることはできないが、しかし *esse* は *agens* への現実的關係ではなく、本性に付け加わる *actualitas* であつて、現実的關係はこれに基づくのである。けだし關係とは他者に基づくものであり、ある他のものの獲得からでなくては獲得されないからである。

第三の異論は *esse* を質料あるいは基体のある規定 (*determinatio*) であるとする意見である。Theorema XV で質料と延長 (*extensio*) は二つのものではなく、質料の延長は *modus essendi* あるいは規定であり、これは基体としての質料に基づく説明された。このことから人々は、*esse* と *essentia* が *duae res* ではなく、*esse* は *essentia* の規定であり、*essentia* は *esse* に対しては基体のごとき關係にある、と云うであらう。これが誰の説であるかは明らかでない。エギディウスはこれに対して、質料とその規定である延長が *duae res* でなく、分量との結合から質料が持つところの *modus se habendi*, *modus essendi* にすぎないように、*esse* とは作用者によつて産出されるということから、*essentia* が持つところの *modus se habendi* もしくは本質の規定であるというのは正しくないと述べている。なぜなら質料が自らと実在的に異なる分量と結合するのでなければ、質料と実在的に異なる延長も *modus essendi* も質料に属さないからである。したがつて質料の中に、質料と実在的に異なる分量がなければ、分量による延長は質料に属さないように、*res* の *essentia* の中にそれと実在的に異なる *esse* がなければ、*esse* による決定は *essentia* に属さない。ゆえに質料は本来的に分量によつて延長を与えられる (*extenditur*) ように、*essentia* は *esse* によつて *existere* するのである。

以上述べたところから *esse* と *essentia* を *duae res* = *entités* として解することは困難であらう。*esse*—*essentia* は *actualitas*—*potentia* として把握されており、*res* は *esse* によつて *existere* してゐると思はれてゐる。

esse は決して存在者ではなく、存在者をして存在せしめているところの存在の根拠である。「res は esse によつて existere している」と言われる時の res は存在者を表わすが、esse を res = entité = 存在者と解すると、「res (= entité) は res (= entité) によつて existere している」となり、全く不合理な無意味な命題とならう。

四

Hocedez は、esse が essentia に付け加わり、essentia から分離される (separatur) ということを、あたかも両者が entité として分離されると解釈しているようであるが、このように解することからエギディウスがトマスを理解していないと主張することは果して妥当であらうか。エギディウスが separabilite の観点から「実在的区別」を説明しているのは Theorema XII のみであるが、そこで「separatur」がいかなる意味で用いられているかをみる必要がある。

この Theorema では、primum 以外のものはすべて suum esse ではなく、esse とは実在的に異なる essentia を持つことが三つの面から論証されるが、その第一は知性との関係からの説明である。res の essentia はその esse を知らなくても認識することができ、たとえばバラが何であるかということは、その esse を知らなくても認識しうるのであつて、バラが存在することはバラについてのわれわれの知識に何も加えない。けだし知性の対象は quidditas であつて esse ではないからである。^(註14)しかしあるものは実在的に (secundum rem)、あるものは思考上 (secundum intellectum) 分離される (separatur) ということに注意すべきである。もし思考上分離されるならば概念的に (ratione) 異なるのであり、これに対して実在的に分離されるならば実在的に異なるのである。実在的に異なるも

のが実在的に分離できるかどうかについては疑問があるとしても、実在的に分離できるものが実在的に異なることについては疑いがない。もし *essentia* が実在的に常に *esse* と結合しているとすれば、常に実在的に *esse* を持つことになる。そうなると決して非存在 (*non esse*) ではありえないことになる。しかし実際には非存在でありうるし、ある時に存在し始めたのであるから、常に *esse* と結合しているわけではない以上、*esse* に関して *potentia* である。しかしこの場合の *potentia* は、類が種に対して *potentia* であるという場合とは異なる。類と種との合成は思考上の合成であつて、両者は実在的に異なる。しかし *essentia creata* はいかなる意味でも *actuale esse* を持たないことがありうるから、常に *esse* と結合しているわけではない以上、*esse* とは実在的に異なる。

この論証でエギディウスが「*separatur*」によつて意味していることは、*creatura* が *esse* を獲得したり失つたりすること、すなわちある時生成し、ある時消滅すること、存在し始め存在することを止めうる (*possunt incipere et desinere esse*) ものであること、つまり *annihilatio* を意味していることは明らかである。ここで *essentia creata* が *esse* を得たり失つたりするといつても、両者を *entités indépendantes* と解する必要はない。というのはさきにも述べたごとくエギディウスは *esse* を存在の根拠として把握し、また *essentia* の *esse* に対する先在をくりかえし否定して、創造されるのは *essentia* なき *esse* でも *esse* なき *essentia* でもなく、両者の合成体であると述べているからである。また「実在的区別」の第二の証明で *universalia* が自存することを拒否しているからプラトンの *idées séparées* と解する余地もない。*esse* と *essentia* とが分離できることをトマスが認めなかつたことを示すために、*Hocedez* は「形相はその *esse* に対して *potentia* のいつとき関係にある。しかしわたくしは *potentia* が *actus* から分離できると云つていのではない。*actus* は常に *potentia* に伴うのである」^(註15) というトマスの言葉を引用して

いるが、エギディウス自身も実在界にある存在者において *esse* と *essentia* が分離できるという意味のことはどこにも述べていない。Theorema X には形相を取り去るならば、*esse* も取り去ることになるという言葉がみえるし、実在界にある存在者 (*res*) には *esse* と *essentia* の合成があるとは云われていても、「*separatur*」が、*esse* と *essentia* は分離されて独立に存在するものを意味すると解せられるような文章はどこにもない。注意すべきことは、*esse* — *essentia* が *actus* — *potentia* として実在的に区別されるという場合、*essentia* とはトマスの用語で云えば *essentia secundum absolutam considerationem* ^(註19) を示していることである。形相一般と質料一般の合成体は本質一般のことであつて、実在界に存在する個物としての合成体ではない。*esse* と *essentia* の実在的区別が云われる際の *essentia* とはこのような本質一般として、それ自体として (*secundum se*) 考察されたところの本質であり、それゆゑに *esse* に対して *potentia* なのである。これに対して実在界に存在するものの *essentia* とはすでに個別的に現実化された *essentia* であつて、このような *essentia* に *potentia* を帰することは不合理である。「実在的区別」とは *actus* — *potentia* として *esse* — *essentia* を考察するところにはじめて可能な超越的性格を有しているのであつて、これを実在界にある存在者に即して理解しようとするのは無意味と云わざるをえない。*actus* としての *esse* に対立する *potentia* としての *essentia* が *essentia secundum absolutam considerationem* であると考えないところから「実在的区別」についてのあらゆる誤解が始まるのであり、この点に留意しないとつぎの第三の論証も誤解される危険がある。

作用者 (*agens*) は常に可能的なものを現実的なものにするところのものである。質料は *potentia simpliciter* を意味し、*esse* は *actus simpliciter* を意味するが、形相はある意味で両方を意味する。*potentia* は完成されるとき

るものであり *actus* は完成するところのものであるが、いかなるものも自ら *actus* になりえないから、質料は形相によつて、形相は *esse* によつてそれぞれ *agens* から完成される。このようにエギディウスは *esse* が *primum agens* によつて *essentia* に付け加わるものであることを論じた後、アリストテレスの誤りを指摘する。アリストテレスによると *forma separata* には存在したり存在しなかつたりすることがない、けだし悪も誤謬も可滅性もないからである。しかし実際には *forma separata* は可滅的であるから、たとえ質料から独立しているとしても *esse* に対しては *potentia* である。したがつてアリストテレスが形相について考えたことは *esse* について理解すべきであり、形相が *non esse* でありえないというのは誤つてゐる。ところで *potentia* 自体は存在しえない。もし存在するとすれば、それが結合する *actus* によつてである。一方 *actus* 自体は常に存在する。 *non esse* になりうるものは *potentia* に受け取られた *actus*、すなわち *potentia* と *actus* の合成体である。

以上要するに *esse—essentia* は *actus—potentia* であり、「*separatur*」とは *creatura* の可滅性を意味するのであつて、これを実在界にある存在者に即して考えることは「実在的区别」そのものの誤解に基づくことが明らかになつたかと思う。エギディウスは「実在的区别」を常に *creatio* の問題と関連させているのであつて、*Theorema XX* では「実在的区别」が否定されるならば、*creatura* は純粹、無限、永遠になることが論じられている。

五

「*forma dat esse*」「*esse fuit a forma*」という表現は十三世紀の哲学者にしばしば見出されるのであるが、エギディウスはこの命題を、部分の形相 (*forma partis*) と全体の形相 (*forma totius*) の観点から吟味している。「The-

oremata」ではなくして「a forma causatur esse」「a forma sit esse」「ab essentia causatur esse et fluit ab ea」等の表現がみられるが、トマスにもこれに類する表現たとえば「Esse per se consequitur ad formam」「forma substantialis dat esse actu」等があり、しかも形相があたかも esse の原因であるかのように受け取れる箇所がある。^(註17) エギディウスにおいても「a forma causatur esse」は形相が esse の原因であることを意味しているであろうか。もしそうだとすれば、これはエギディウスのプラトニズムを示すことになろう。「a forma causatur esse」はこれだけ切り離してみるといかにもそういう意味に取れるかもしれないが、しかし「Theoremata」全体の構成からみた場合、そういった解釈は困難であるように思われる。エギディウスが部分の形相と全体の形相の区別によつてさきの命題を吟味している Theorema VIII は次のようである。

Omne res materiales formam partis et formam totius in se habere dicuntur, et quia a forma causatur esse, videbitur ex hoc duplex esse in rebus materialibus reperiri. Sed illorum unum est esse simpliciter, aliud vero non est esse simpliciter, sed modus essendi poterit nuncupari.

res materiales には部分の形相と全体の形相の区別があり、「a forma causatur esse」であるから、二様の esse が見出されることになり、その一つは esse simpliciter であり、他は modus essendi である。二様の形相が誤解されないためにエギディウスは Theorema IX で二つの形相 (duae formae) ではなく、二様の形相 (duplex forma) あるいは二様に云われた形相 (forma dupliciter dicta) であると注意している。すなわち両者は部分を意味する場合と全体を意味する場合とに応じて云われるのであり、部分、全体とは形相それ自体を考えるか、形相と質料の合成を

考えるかによるのである。形相と質料とから合成された *essentia* が全体の形相と呼ばれるところの全体 (*totum*) としての形相であり、この全体の形相を通じて、基体は *esse* を所有している (*per hujusmodi (totius) formam ipsum suppositum habet esse*) のである。たとえば *humanitas* は人間の形相であり、^(註18) この *humanitas* を通じて、人間は *esse* を所有すると云われる。これに対して *essentia* の部分を意味する *anima* は部分の形相と呼ばれる。全体の形相から生ずる *esse* は全体の形相と実在的に異なるが、部分の形相から生ずる *esse* は全体の形相と異ならず、*esse simpliciter* ではなく、*modus essendi* である。したがって *res materiales* には形相と質料の合成のみではなく、*esse* と *essentia* の合成があるという場合の *esse* は全体の形相に由来する *esse* である。部分の形相に由来する *esse* は *modus essendi* あるいは *determinatio materiae* であって、全体の形相と異ならないことは Theorema XV で実体に関して Theorema XVI では偶性に関して詳しく説明されている。一方 *res immateriales* は質料と合成せず、*natura simplex* を持っているので部分の形相と全体の形相の区別は問題にならない。したがって *res immateriales* は、その本質であるところの形相のみを通じて *esse* を所有しているのである。

さて部分の形相に由来するところの *modus essendi* は要するに、*essentia* の *ordo* において規定し、完成するものとしての形相と、規定され、完成されるものとしての質料との本質構成原理のことであるから問題はないとしても、*res materiales* においては全体の形相を通じて、*res immateriales* においては *forma simplex* を通じて生ずる *esse simpliciter* については一応さきに述べた疑問が生じよう。しかしこの場合、形相が *esse simpliciter* の原因であると解するには種々の困難がある。なおこの場合「*a forma*」という表現にこだわる必要はない。けだしすでに引用した箇所にも用いられているように、「Theoremata」では「*per formam*」という用語も使用されているから

である。再三述べたごとく、形相は質料に関して *actus* であるとしても、その *actus* は本質構成原理間での *actus* にすぎず、*essentia* は *esse* の *ordo* に関しては依然として *potentia* である。ゆえに、もし形相が *esse simpliciter* を与えるとするれば、*potentia* が *actus* の原因であることになり、*agens* は *actus* である限りで作用し、*potentia* を *actus* にするというときに挙げた作用の原理と矛盾することになる。

ゆゑに「*res materiales* も *res immateriales* も形相に由来する *actus* において可知的であるが、しかし *esse* からの *actus* なくしては *existere* しえなう」(*Theorema X*) とが「*res immateriales* としえなう *primum* から *esse* が付け加えられない限り現実的に *existere* できなう」とが「*primum* 以外のものは *essentia* によつて *ens* ^(註21) であつても、*essentia* に付け加わる *esse* なくしては *existere* しえなう」(*Theorema XIII*) と云われつつあるように、*esse* はあくまでも *essentia* の外から *essentia* が受容するところのものとして、作用因としての *primum* (*deus*) に由来するものとして超越的に把握されているのであるから、形相が *esse* を与えるとするれば「*Theoremata*」全体が矛盾したものにならう。したがつて「*per formam totius causatur esse*」という命題は、*esse* が *essentia* に結合している限り、*essentia* という「水路カナルを通じて」^(註20) 制約されて生じているという意味に解すべきである。たとえば *causatur, fuit* のいふも用語が用いられているところでも、*esse* は *primum* によつて *essentia* に付け加えられるものである以上、これをプラトンの受け取る余地はない。そしてこのように解釈することは *esse* と *essentia* の分与関係とも一致するのである。

esse は本来、類 (*genus*) を越えているのであるが、もし *esse* が類へ決定される (*determinatur*) とすれば、それは *esse* を受容するところの *essentia* によつてである (*Theorema XXI*)。 *ipsum esse* が *actus purus, actus*

omnium aliorum であるのに対して、essentia に受容された esse は essentia の conditiones に制約されて類く決定されている。Theorema I では esse は esse purum infinitum と esse in alio receptum participatum, limitatum と分けられている。エギディウスはボエチウスの「De Hebdomadibus」から id quod est はあるものと分与するが、^(註21) ipsum esse は分与しないという言葉を引用している。ipsum esse が何ものにも分与しないのに対して、esse in alio receptum は essentia によって分与された esse creatum であって、受け取るものの様式に従って (secundum modum rei recipientis) 受け取られ、制約されている。そしてその per formam なる secundum modum rei recipientis に当るわけである。それゆえ esse は secundum partem に受け取られているのである。分与は quasi partem capere を意味し、受け取られるものは secundum partem capitur であり、受け取るものは secundum partem capere である。この essentia による esse の分与とは、種と類の分与関係のこととく思考上のものではなく、実在的分与 (participatio realis) である。すなわち常に potentia による actus の分与であって、actus は actus である限り決して分与せず、したがって maxime actus たる esse が分与される際、制約はあくまで essentia の側から来ることに注意すべきである。なお分与の問題においても essentia secundum absolutam considerationem を念頭に置くべきであらう。^(註22) 「Theoremata」では分与についてこれ以外の詳しい叙述はないが、以上述べた限りではトマスと異なるところはない。

六

以上エギディウスの本文に即して述べたことを要約すると次のようになろう。「Theoremata」において最も注目

すべきことはトームスの esse—essentia—existere の関係が保持されていることである。すなわち後のスコラ学者における esse—essentia は existentia—essentia と置きかえられるようなことはなく、esse existentiae, esse essentiae という用語すらみあたらないことである。essentia に対しては必ず esse が用いられ、existere が esse—essentia との関連において用いられる時は、esse—essentia の合成体が實在界に (in rerum natura) に存在することを表わしている。「Theoremata」全体を通じて esse—essentia の實在的区別の問題は actus—potentia という原理の面から考察されているが、essentia の ordo と esse の ordo が混同されるようなことは決してない。res materiales は二重の actus—potentia の関係があり、actus として形相のみが本質構成に關与するのではなく、potentia としての質料もまた本質構成原理なのであるが、しかしこの本質も esse の ordo に関しては全くの potentia であつて、たとえ質料から離存しているところの res immateriales といえども例外ではなく、形相と esse の合成である以上、ipsum esse たる primum ではありません。primum によつて esse を付与されない限り決して existere しないのである。しかし esse が essentia に付け加わるといつても、両者を entités indépendantes と解するのは誤つてゐる。essentia は決して esse に先在するものではなく、創造されるのは両者の合成である。したがつてこの場合の essentia は essentia secundum absolutam considerationem と考えるべきである。esse は ipsum esse purum における esse であると同時に、essentia に受容された esse limitatum participatum として res creata を存在せしめているところの存在の根拠であり、分与の観点から超越的に把握されているのであつて、この超越的關係においてはじめて esse と essentia の實在的区別が主張されるのである。esse は決して「existere」「……がある」を意味するのではなく、存在者としての res creata の内奥にあつて、これを existere をせつてゐるものも

のである。^(註24) このようにエギディウスは「Theoremata」において形相と esse を明別し、本質主義を徹底的に拒否しているのであつて、たとえトマスにみられぬ多くの論証を提供しているとしても、トマスの精神を理解していないとは云えないと思ふ。^(註25)

esse—essentia を existentia—essentia と置きかえるならば「potentia である essentia が actus である esse によつて existere する」という命題のみならず、「実在的区別」そのものが無意味となるであらう。existere している限りでの essentia はすでに現実化されているからである。現実に存在する res creata は esse と essentia の合成であると云うのは正しいが、existentia と essentia が実在的に分離できるなどとは到底考えられないであらう。esse—essentia を existentia—essentia と置きかえた後のスコラ学者が「実在的区別」を否定して、「思考上の区別」を主張したのはけだし当然の成り行きであつたと云わねばならない。J. Hegyi は、esse を existere の意味に取るなら実在的区別について語ることは無意味であり、多くのトミストが実在的区別を主張しながら、esse において単に existere の意味しかみないのは驚くべきことであると述べているが、^(註26) まことに尤もだと思ふ。

Hocedez が「duae res」「separatur」という表現に注目し、esse と essentia をあたかも deux entités indépendantes のように解釈しようと主張したのも、おそらく esse—essentia を existentia—essentia と置きかえた大方のスコラ学者の見解に影響されて、「Theoremata」を哲學家として客観的にみることができなかったからではないだらうか。Hocedez は、エギディウスがかつての師の深い精神を理解せず、esse—essentia の問題についてより physique な matériel な解釈をしたと述べているが、「Theoremata」に関する限り physique な解釈をしたのはむしろ Hocedez 自身であるように思われる。なるほどトマスは「duae res」「separatur」という用語は使用していないし、

もつばら *esse—essentia* の合成について語り、区別 (*distinctio*) の面からはあまり論じていない。そしてエギディウスがこのような用語を使用したことは、たしかにトミズムの歴史において不幸なことであつた。なぜなら *esse—essentia* が *existentia—essentia* に置きかえられたことと共に、「*duae res*」「*separatur*」という表現はトマスの精神が誤解されるものになつたと考えられるからである。エギディウスの影響を受けた Thomas de Sutton にはすでに *res* という表現がみられ^(註27)、スコトゥスは「実在的区別」も「思考上の区別」も否定して、「形式的区別」(*distinctio formalis*) を主張した際、「実在的区別」を *distinctio inter rem et rem* として扱つて^(註28)いる。スアレスもまた「実在的区別」を攻撃する際 *duae res* という表現を用いて^(註29)いる。しかし後世の人が勝手に解釈した用語の意味を、それと違つた意味で用いられていた同じ用語に付与するとすれば、*einlegen* の誹を免れまい。スアレスに通曉していた Hocedez は用語の系譜の源をエギディウスに見出したことから、スアレスの先入見をもつて「*Theoramata*」を *hin-einlesen* したのではないだろうか。したがつてさきに挙げた哲学史家の記述も正確とは云えないであろう。

「エギディウスはトマスの中に潜在していた根本的イデーを取り出したという意味で、トマスの綜合を成し遂げたのであり、いかなる命題も批判的に吟味した後でなければ採用しなかつた人である」と云う限り、Hocedez は正しいが、エギディウスが「実在的区別」について *physique* な解釈をしたという説は訂正されるべきである^(註30)。これは「*Theoremata*」に関する限りでの結論であるが、「*Quaestiones disputate de esse et essentia*」においてエギディウスが果して思想の変化を示しているかどうかについては稿を改めて考察したいと思う。

註1 P. Mandonnet; *La carrière scolaire de Gilles de Rome*. (*Revue Sciences philosophiques et théologiques* 1910,

p. 480—499)

註2 E. Hocedez; Gilles de Rome et saint Thomas (Mélanges Mandonnet I. 1930. p. 385—409)

註3 E. Hocedez; Aegidii Romani Theoremata de Esse et Essentia, 1930.

註4 P. Nash; Giles of Rome, Auditor and Critic of St. Thomas. (The Modern Schoolman, 1950, p. 1—20)

P. Nash; Giles of Rome on Boethius' "Diversum est esse et quod est". (Mediaeval Studies, 1950. p. 57—91)

P. Nash; Giles of Rome and the Subject of Theology. (Mediaeval Studies, 1956. p. 61—92)

註5 F. Copleston; A History of Philosophy. vol. II. 1954. p. 460—465.

E. Gilson; History of Christian Philosophy in the Middle Ages. 1955. p. 420—423. p. 735—737.

G. Leff; Medieval Thought. 1958. p. 233—245.

註6 「Theoremata」は「Questions」を Hocedez による批判版が出版されるまで混同されていた。エギディウスの著作年代はまだ確定していないが、一応「Theoremata」は一二七〇—七八年、「Questions」は一二八五—八七年としておく。エギディウスは一二七七年トマス派の実体的形相の単一性を弁護した書「De gradibus formarum」のために、パリ大学を追放された。「Theoremata」がその直後に書かれ、一方「Questions」はアウグスティノ会が送る最初の教授としてパリ大学に復帰した時代のものであることは注意する必要がある。パリ大学復帰については、形相単一説を撤回する必要がある、この問題について、エギディウスに意見の変更があったと云われている。このような事情から「Theoremata」と「Questions」では細かな点で思想の相異がみられるかもしれない。したがってエギディウスを研究する際には著作別に扱うのが適当と思われる。なお P. Nash は「Theoremata」には触れていないので、本稿ではもっぱら Hocedez の解釈について考察する。

註7 ボエチウス「De Hebdomadibus」の Diversum est esse, et id quod est; ipsum enim esse nondum est; at vero quod est, accepta essendi forma, est atque consistit. (PL. 64, 1311) と云う「quod est」は具体的に存在するものを指し、esse は形相を意味する。トマスは右の命題と云うる esse を esse simpliciter の意味に取っている。エギディウスも id quod est = essentia, esse = esse simpliciter と云う。ボエチウスの解釈と云うのは
H. Brosch; Der Seinsbegriff bei Boethius. (Philosophie und Grenzwissenschaften, Bd. IV, Heft, 1, 1931)

エギディウス・ロムヌスと云うる esse と essentia

松本正夫教授「西洋哲学史」(古代中世)(慶応大学通信教育テキスト第六分冊)二八二—二八三頁、三〇二—三〇三頁。
たとえばトマスの讃美者 Aegidius de Lessines、トマスの「政治学」註釈を完成した Pierre d'Auvergne 等

註 8 A. Graiff; Siger de Brabant. Questions sur la Métaphysique. 1948. p. 16.

註 9 A. Maurer; Esse and Essentia in the Metaphysics of Siger of Brabant. (Mediaeval Studies. 1946. p. 68—86)

註 10 Thomas Aquinas; Comment. in IV Met. lect. 2.

註 11 Henricus Goethals a Gandavo, Aurea quaestiones quodlibetales, I, Q. 9, fol. 11r (1608, Ventiis)

註 12 スコトウスは Opus oxoniense, I. 36 などについてヘンリ・リ・ヴィタ・ガンの説はキリスト教の無からの創造説を破壊すると論じている。

註 13 Thomas Aquinas; I Sent. dist. VIII, q. 5, a. 4.

註 14 この論証はトマスの「De ente et essentia」とみなせるがあまり適切な論証とは思えない。むしろ後のスコラ学者が「実在的区別」を否定する遠因になったのではないか。

註 15 Thomas Aquinas; De spirit. creat. a. 1.

註 16 トマスがアヴィチャエンナから継承した essentia secundum absolutam considerationem と同じな「De ente et essentia ed. Roland—Gosselin. cap III.

註 17 この点について歴史的研究としては、

A. Maurer; Form and Essence in the Philosophy of St. Thomas. (Mediaeval Studies, 1951. p. 165—176)

体系論的解釈について

松本正夫教授「実存と本質の区別が質料形相論に及ぼす影響について」『中世思想研究』、一一三四頁、一九五八年・垂水書房)

註 18 この例はトマスの De ente et essentia, cap. II など。

註 19 ens はいつい modus essendi, praedicamenta の意味で用いられている。existere は esse と essentia の合成体が実在界に (in rerum natura) 存在することを表わすのに用いられる。なおエギディウスは ens と同じく、これがしばしば existens の意味で使用されていると述べている。とにかくエギディウスは modus essendi と esse simpliciter を明別し、

esse, existere, ens などを使い分けていることは、田中久雄の『トマス・アクィナスの神学』(1964)を参照。

註20 松本教授前掲論文一〇頁、一四頁。

註21 註20を参照。

註22 『トマス・アクィナスの神学』(1964)の四巻の分冊を参照。

essentia と esse の区別については、『トマス・アクィナスの神学』(1964)の四巻の分冊を参照。

Omne igitur quod est post primum ens, cum non sit suum esse, habet esse in aliquo receptum, per quod ipsum esse contrahitur; et sic in quolibet creato aliud est natura rei, quae participat esse, et aliud ipsum esse participatum. (De spirit. creat. a. 1)

Omne participans aliquid comparatur ad ipsum, quod participatur, ut potentia ad actum, per id enim, quod participatur, fit participans actuale. Ostensum est quod solus Deus est essentialiter ens, omnia autem alia participant ipsum esse. (s. c. g. II. c. 53)

quasi partem capere という用語は In Hebdomadibus, lect. II 第49段「Est autem participare quasi partem capere」(1964) L. B. Geiger の『トマス・アクィナスの神学』(1964)の participation par composition と participation par similitude の区別(1964) (La participation dans la philosophie de S. Thomas d'Aquin. 1942) C. Fabro の『トマス・アクィナスの神学』(1964)の uno predicamentale—univoco, l'altero transcendente—analogico. (La nozione metafisica di partecipazione secondo S. Thomas d'Aquino, 1939. p. 324)

『トマス・アクィナスの神学』(1964)の「原因論註釈」で、トマスは詳しく論じているが、これについては他の機会にトマスの「原因論註釈」と比較してみたいと思う。

註23 esse が essentia に付け加わることは云われていても、『トマス』(1964)におけるトマスの「偶性的」と「偶性として」という表現は「Theoremata」(1964)にみえたらしく、この用語は『トマス』(1964)に由来するが、『トマス』(1964)におけるこの問題については、『トマス』(1964)の J. Owens; The Accidental and Essential Character of Being in the Doctrine of St. Thomas Aquinas. (Mediaeval Studies, 1958. p. 1~40)

註24 トマスはこの点を次のように表現している。

『トマス・アクィナスの神学』(1964)における esse と essentia

註25

Esse autem est illud quod est magis intimum cuiuslibet, et quod profundius omnibus inest; cum sit formale respectu omnium quae in re sunt. Ude oportet quod Deus sit in omnibus rebus, et intime. (S. Th. I. q. 8, a. 1) Theorema XVII では「システム」といつて無意味な pluralitas formae といつて述べられてゐるが、ヘギティウスは「De gradibus formarum」において、これを拒否したばかりなので奇異な感じを与える。Hocedez はおそらく一七二七年の異端宣告を顧慮してゐるのであらうと示唆してゐる。いずれにしてもヘギティウスはこの問題に触れたがらず、合成体において実体的形相が「一であらう」と「多数であらう」と「esse simpliciter は一であり、たとえ形相が多数だとしても、それは modus essendi との關係するべきではない」。

註26

J. Hegyi; Die Bedeutung des Seins bei klassischen Kommentatoren des heiligen Thomas von Aquin. 1959. s. 5

註27

F. Pelster; Thomae de Sutton, Quaestiones de reali distinctione inter essentiam et esse. 1929. S. 35.

註28

Duns Scotus; Opus oxoniense. II, d. I, q. 2.

註29

.....Essentiam creatam in actu extra causas constitutam, non distinguí realiter ab existentia, ita ut sint duae res seu entitates distinctae. (Disputationes Metaphysicae. d. XXXI, sec. 6, n. 1)

註30

本稿における Hocedez 語批判は「Theoremata」と題する部分にいつてのみなされたい。Hocedez 語を全面的に否定してゐるわけではなからう。